

# 甲賀市の文化財②⑥

## 甍った矢川神社楼門

平成16年7月から4年計画で行われた矢川神社楼門の解体修理が、このほど完了しました。室町時代の楼門にはどのような歴史があったのでしょうか。

甲南町森尻に鎮座する矢川神社は、平安時代の延喜式神名帳にその名が載る古社で、「甲賀の雨宮」としても知られています。

正面に建つ楼門は、間口三間、屋根は入母屋造りの茅葺きで中世の建築様式を残す建造物として、昭和41年に滋賀県指定有形文化財に指定されました。しかし長年風雨にさらされ破損が進行。この度地元の方々のご努力により、滋賀県教育委員会文化財保護課が主体となって、解体修理が行われたものです。すべての部材を丁寧に解体し、破損した部分を補修しながら組み上げる文化財修理のため、工事期間は4年間に及びました。

この楼門が建てられた経緯が杜蔵文書「矢川雑記」(享保8年)に記されています。「古へ大和国布留の社の辺り、五十余村の人々当社の威儀を伝え聞て、一年大旱に当社へ祈雨し、其神徳に報いて楼門を建立し」とあり、現在の奈良県天理市周辺の住人が、雨乞い祈願成就の返礼として寄進したのがこの楼門だということです。その時期は「矢川雑記」や「式内矢川神社由緒」では、文明四壬辰年(1472)としていました。しかし解体してみると、隅行き肘木からは「矢河之楼門」(柱立文明十三年九月廿二日)、間斗部分からは「文明十四年六月」という墨書が発見されました。すなわち文明13年に組立が開始され、14年(1482)に完成をみたことが明らかとなりました。

また本来楼門とは高欄を廻した二層形式ですが、この楼門は見てのとおり単層。「矢川雑記」によれば、天正元年(慶長か)の大風で屋根が吹き落とされ、十数年も雨露に曝されていたところ、慶長年間に杉谷村の木村氏が森の茅を刈って、現在のような初重の楼門になったのだと記しています。実際小屋内部には上階部分の柱が現存している他、組物の痕跡も残っていたため、当初はやはり二層の楼門であったと考えられ、より豪壮な姿でそびえていたのでしょう。そして杜蔵文書が現在の姿になった事情を如実に伝えてくれます。

文化財修理はこのように、楼門に秘められた歴史を縮きながら進めていきます。室町時代の優美な姿が甍った楼門を、これからも地域の歴史遺産として守り伝えていきたいものです。

### 問い合わせ

歴史文化財課

調査管理係

☎ 86-8026

FAX 86-8216

▲矢川神社楼門



## 新

名神高速道路がいよいよ来年開通。近畿と東海を結ぶ新たな動脈として期待が高まります。道路はいつの時代も経済・社会活動の基盤ですが、古代の近江には東海道・東山道・北陸道の三つの官道が貫通、甲賀にも東海道が通じ交通の要衝となりました。

古代東海道はまずは都のある大和から伊賀をへて伊勢に抜ける道でした。大津宮時代には一時的に甲賀をへて伊賀に至りましたが、甲賀に本格的に東海道が通じたのは山城に都が遷った平安時代以降のことで、三雲から杣川に沿って伊賀へ抜け、加太を越えて関へ至る道で、これを「倉歴道」と呼びました。柘植までは杣街道や、JR草津線と重なります。

ところが、仁和二年(886)に東海道は突然野洲川に沿って鈴鹿峠を越えるルートに変更されます。斎王もここを通り、垂水頓宮が置かれました。これを「阿須波道」と呼び、以後東海道は近代に至るまでこのルートを踏襲。現在の国道1号線もその歴史の

なかにあるといえます。ただ「クラブ」は甲賀と伊賀に見える歴史地名ですが、「アスワ」は地名としては伝わりません。はたして「阿須波」とは何なのか、なぜ平安遷都後百年近くもたってから、平坦な倉部道をやめ、難所とされる鈴鹿峠越えが採用されたのか？市史第一巻ではその謎に迫ります。



▲新旧の道が交錯する甲賀市

# 市史の小径

第23回

## 「阿須波」とは何か？

～古代東海道の謎～

問い合わせ 歴史文化財課 市史編さん室  
☎ 86-8075 FAX 86-8216